

## 社会改革の進む中で

大梶 優子



T様

お見舞の、また励ましのお手紙を有難うございます。

新聞やテレビでの情報を追いつながら、遠くから応援して下さっているとのこと、とてもうれしいです。私がうれしというのも、少し変な感じですが。私自身は、ここに日本人、つまりは外国人のまま暮らしています。チェ

コスロヴァキアの人々からみれば、「お客さん」的な要素を多分にもちあわせているわけです。家族の一員として歩みを共にしながら、社会情勢の動きをとらえ、胸おどる思いをしながら、心情的には高まっている横で、やはり感心したり、尊敬したり、案じたりといったような

「ながめる」体験が成立してしまいます。近くから、私も応援していますと言う方が、適切かもしれません。ですから、応援して下さるお気持ちを、すぐに家人に伝えました。心から喜んでいきます。

返事を書くのが遅くなつてすみません。十一月十七日夜の出来事が伝えられて以来、急速な社会変化をとらえていくのに精一杯というところです。それを怠ると、変化の流れがわからなくなるといふ心配が先立ちます。社会全体が、多くの人々の望む、よりよい方向に変わっていくので、一層積極的にそこへ関わっていきたくなるのかもしれない。

最初の情報は、駅の壁や店のショーウィンドウに貼られたビラでした。学生デモ弾圧に対する抗議文、労働者や勤労者の学生支持表明に始まり、地域や職場での改革の進め方の助言、ワンクッションおいたユーモラスな従来の体制への批判、子ども達の応援など、多種かつ多量なのにびびくりしました。町の中心ばかりではなく、郊外のバス停や山のスキーリフトの切符売り場といったところまで広がっているのにも驚きました。書く人も、貼る人も、読む人も、皆まじめで熱心です。ビラのまわりには、いつも静かな落ち着いた雰囲気か漂っているのに気づきました。帰宅途中の夫婦が、若者達が、連れだつて読んだ後の感想を言い合う時も、おだやかな口調なのです。一度手渡されたビラが、路上に舞い散るのは、ずい分違った光景だなあと思いました。新しい大統領が選ばれて、政府のレベルでの改革が始まり、ビラは一掃されました。貼った後も見えないほど、壁もショーウィンドウもピカピカになりました。あたり前というのは、何か気恥ずかしい気がします。一人一人の市民の良識の

具現ともいえるのでしょう。

学生達の立ち上がりから数日遅れて、テレビ局が、市民の立場に立つて公開する方針を表明しました。テレビ番組がおもしろくなりました。すっかり「テレビっこ」になっています。辞書を横に置いて、メモをとりながら、テレビを見続ける、このような経験は初めてのことです。それでも間に合わないときは、わからない単語を叫んで、「後でお願いね。」と、家人に声をかけておきます。「私に用事のある人は……。」と、番組を見ない時間を前以って具体的に言うのも忘れません。そして、その時に、子ども達の学校からの連絡、宿題の点検とサイン、あるいは家事をすませます。今にして、「テレビの時代に生きている」ことを実感しています。テレビを見るのが、時間の無駄と思える時が、再び来るでしょうか。その時は、どのような社会になっているのでしょうか？

テレビで全体状況を知っておいて、特別の内容だけ新聞で読みます。追いかけられるようにして読みますか

ら、普通よりも速く読み進んでいます。やはり外国語の域を越えられません。残念です。新聞の種類が、ずいぶん分れました。一人の人が、何種類もの新聞を読みます。いろいろな人が、いろいろな新聞を読みます。これは、大きな変化です。市電や地下鉄で、今は本よりも新聞を読む人の方が多いです。ついでですが、乗り物の中で、以前は、若い男女が身を寄せることで幸せを感じ合おうといった風な場面をよくみかけたのですが、最近では、二人の間の空間に幸せが漂い、二人の周囲に幸せが広がっているようです。「若者達の明るい表情」は、個々の顔だけでなく、行動にも表れています。

テレビであれ、対話集会であれ、公の席での発言を聞いて思うのは、自分の考えを自分の言葉で話せることはすばらしいし、また、聞く方もよくわかるということですね。私にとってチェコ語は外国語ですので、なんとなくわかるという次元で理解していることが多々あります。このような時にわかりにくいのは、相手の考えていることと、話していることが違っている場合です。い

ろいろな制約の中で、無理な表現を用いている場合があります。チェコ語を日本語に置き換え、連脈の中で理解しようとする頭の中での作業が追いつかないばかりか、相手の意図がつかめずに、悩むという状態になります。プラハで日常のチェコ語がわかりかけたころ、私はこのような経験をして、「くらしの中のチェコ語学習」の一つの段階が終わったのを感じました。後になって、チェコの友人に話した時、「ここでは、同じ母国語の間で似た経験をしているのですよ。違うことを言いながら、違うことを考えてくらすことに慣れていくことがおそろしい。」と答えたのが印象に残っています。お互いに相手のことに関心をもたず、何も信じないようになるのを恐るべき、話し、相手にわかってもらおう、相手をわかってもらう努力をし始めました。民主的な社会改革の第一歩というわけですね。

おそらく、こちらでの社会情勢の変化そのものについては、または、または、その政治的、社会的な分析については、

新聞雑誌でよくご存知のことと思います。世界情勢との対応については、私よりもずっと多くの情報を得ていらっしゃることでしょう。私がここに住んでいて、考えてみたいこと、不思議に思えることは、もっと素朴な、人々のくらし、人々の行動のレベルでのことです。

それは、政府の命令で動いた人以外に、暴力をふるった人が全くいないという事実です。たとえ暴力をふるわれても、「目には目を」式の反応をした人がいないという事実です。プラハ市の中心のヴァーツラフ広場に、大勢の人が集まった時、すべての店は営業中ででしたし、駐車中の車はたくさん並んでいました。集会が終わって人々が散っていく時、町はやはりもとの状態でした。そして、集会が重なる毎に、改革は一步一步進められていきました。

大勢の人々は、皆それぞれにやって来ました。そして、あたかも行動のしかたや順序を予行演習したかのよう、適切に、敏速に、しかも整然と行動しました。それが、改革を進めていく大きな力になりました。いった

いどうして、こんなにたくさんの方が、指示も助言もなしに、一瞬の間に何をすべきかを判断し、行動することができるのでしょうか？ 私がそれを口にした時、知人が少し笑って言いました。「行動形態だけを問題にするのなら、長年の学習経験がありますよ。ただ四十年間は、動員されてのことでしたがね。メーデーの時など。」それを今回、新しい目標に向けて応用したということでしょうか？

フランスの報道紙は、この「文化水準の高い人々の行動」を称えて、一連の動きを「ビロード革命」と名付けました。この国では、「静かな革命」「おだやかな革命」と呼ばれています。歴史の発展、特に最近の東欧の一連の改革の流れに位置づいて実現したことです。従来になかった、一歩進んだやり方で実現したことだけは明らかです。

はじめの頃、「子どもの革命」ともよばれました。学生達が先導して、大人達がこれを支持する形ですべてが始まったからです。各々の立場を守り、各々の課題を成

立させて共闘、いえ共働しています。

学生達の動きや発言を、まず大人自身が尊重しました。真実に対して誠実であろうとする態度、政治に対する理想、市民としての勇氣と自覚ある行動などを、経験もなく、学習する機会も与えられずにいて、どのように身につけたのか、教師や母親達が感心しながらも不思議がりました。学生達が、大人集団で発言する時、「学ぶ者」「未来の専門家」の立場を守り、それが過去の歴史を担った大人が無理をしなければならぬ苦しい立場を救うことにつながっているようです。一般に言われる「親子の断絶、世代のギャップ」は、どこにあるのでしょうか。人間を大切にする精神、民主主義の精神は、一度習得すれば、人々の意識のどこかに生き続け、はつきりとはしない形で世代から世代へと、日常のくらしの中で受け継がれるものなのでしょうか。時期到来の時、誰もが表現できるように心準備できていたというのでしょうか？ 不思議なことですが、すばらしいことです。

こうした運動の精神的、組織的な柱になっているの

は、「市民フォーラム」という団体です。政党ではなく、自由選挙の実現と共に解体することになっている運動体です。フォーラムとは、ラテン語で広場という意味だそうです。自分達の生活、共同体をよりよくするために集まり、話し合いをする「市民の広場」というわけです。全国各地で自発的に組織し、すべての人を、あらゆる活動を包み位置づけて、活動を開始しています。

この国に住み続ける私に、いろいろな人々が、何が入っているか尋ねました。「静かな落ち着いたくらしがありますし、母親としては、家族生活が大切にされる社会は、何よりうれしいことです。」これは、本音です。将来、高度経済成長が実現して、豊かな消費生活がもたらされても、同じことが言えるようにというのが、私の偽りのない願いです。

思うまま感じるままの手紙になりました。

一九九〇年一月十四日 プラハにて